

大会報告論文

人文地理学と地域歴史博物館

坂本育男*

I. 地域歴史博物館と「歴史」

現在都道府県、市町村をはじめ私立の博物館が多数設立され、当然のこととして専門職員である学芸員が著しく増加している。ところが学芸員の多くが史学や考古学出身者で、地理学はそれらに比べると著しく少ないし、館の事業に表だって地理をあげているところはまずない。1995年、1996年の立命館地理学会の大会テーマに「地理学と博物館」が選ばれたのも、「なぜ地理学出身者は博物館の学芸員になることが少ないのか」ひいては「なぜ地理学が博物館で一定の位置を占めることがないのか」の疑問から発したものと聞いた。地理学はきわめて広い内容をもっており、地域理解に貢献しているはずであるが、従来、地理学界で博物館が議論されることはほとんどなかったらしい。私自身博物館で「民俗分野」を担当しており、しいて博物館と地理学との関係を考えることはなかったし、地理学の立場で館へ訪ねてくる人もまれであった。

地理学と日本の博物館が疎遠なのは、博物館の性質・現状と地理学とのずれ、日本の博物館の制度的問題によるものと考えられる。私は問題解決のための処方まで示すことはとうていできないが、博物館の問題の指摘と

*福井県立博物館・主任（学芸員）

もに、地理学出身者の取り組みをみることによって、一つの方向を示したい。

なお、ここで問題にするのは主として「地域歴史博物館」である。「博物館」は一般的な使い方でも、博物館界での定義でも広い内容をもつが、地理学ことに人文地理出身者が専攻を生かして、あるいは少なくとも、ときに地理学出身であることを意識して活動できるのは美術館や水族館ではなく、地域歴史博物館であると考えからである。「地域歴史博物館」は博物館界でもほとんど使われていないことばであるが、一定地域の事象を扱う歴史博物館と考えることにする。内容は概ね次のとおりである。

「地域」は、その施設が作られている地点を中心にしたある広がりの中のもの・ことを調査・研究・収集し、域内に居住する人またはその土地を訪れる人を対象に展示などをするという、施設の事業のありかたを示すものである。国全体など広域を対象とするものも含まれることになるが、ここでは都道府県程度までを対象とする施設とする。地方公共団体が設置するものが大部分であるため、事業の主な対象空間は都道府県や市町村の内部とすることがおおい。

「歴史博物館」は日本博物館協会の館種区分にも採用されている。ここでは「考古・民

俗を含む」とされており、「公立博物館の設置・運営に関する基準」にある「人文系博物館」のうち、主として造形芸術を扱う「美術館」を除いたものと考えてよいだろう。つまりこの場合の「歴史」は、時間の流れのなかで行われた人の思想・行為、その結果作られたもの・ことをすべて含むことになり、史学に限らずこれらを対象とするすべての学問分野が関わりをもち得ることになる。科学技術や産業、美術の資料も、それらに特化した施設と扱いが多少異なるとはいえ、歴史博物館が排除するものではない。したがって歴史博物館よりも「人文系博物館」のほうがより正確と言えるが、ことばの固さから施設の名称では「歴史博物館」だけが使われている。

II. 地域歴史博物館のなかの地理

博物館では個々の学芸員が担当すべき分野を決めている。学芸員の担当分野を見ることで博物館がどのような事業を展開しようとしているかをほぼ理解することができる。日本博物館協会の『全国博物館職員録』掲載の県立クラスの博物館のうち、美術館のように特定の分野に特化していない施設でありながら、自然・人文をあわせもつ「総合博物館」の人文部分、歴史博物館の担当分野を見た。それらは歴史・考古・民俗などがほとんどであり、美術館を別に設置していても、美術担当をおいている施設が少なくない。しかし地理を担当または専攻として職員名簿に記載しているところはまずみられない。地理担当の職員をおいているのは、市立まで含めても千葉県立房総のむら、神戸市立博物館、相模原市立博物館だけしか確認できなかった。神戸市立博

物館は大規模な古地図のコレクションがあることから、この分野を扱うために人文地理担当を1人おいている。相模原市立博物館は天文・自然も含みながら学芸職員は7人だけで、うち1人が人文地理担当になっている。以上は例外的な存在である。つまり一般的に地理は地域歴史博物館のなかで学芸員に分担させるべき分野とみなされていないのである。

次に事業のなかでは地理はどのようにあらわれているだろうか。博物館の業務は調査研究・収集保管・展示などとされる。博物館は、かたちあるものを公開することで、社会教育施設のなかでも図書館、公民館と異なり、常に一般の人の利用を想定していることで大学や研究機関、単なる収蔵庫と異なっている。業務のいずれに重点があるかは意見が分かれるにしても、展示のない博物館はありえない。地理学的な調査研究が行われていたり、地理に対する配慮があるなら、それは当然展示に反映されるはずである。

館によって名称や意味付けが異なるが、歴史博物館の展示には通常、常設展と特別展（または企画展）の二つがある。

常設展示は展示の基本である。入念な検討を加え、多額の経費をかけて作られており、その施設の性格や目的を端的に示している。地域の事象の骨格の紹介と初歩的な理解をめざしているために、数多くのテーマを取り込んでいる。都道府県立や大規模な市立の博物館は1,000~2,000 m²が普通で、トピックを含みながら、原始から現代まで時間を追う通史として構成することが多い。県庁所在地に作られる中央館的施設ではさまざまな内容をカバーすることが求められ、そのためにも時間軸上の配置がわかりやすいと考えられてき

た。トピックは美術であったり、文学であったり、民俗を入れるなどさまざまである。長期間にわたって構成テーマが変更されないのが普通で、「いつ行っても変わっていない」と言われるのはこの部分であるが、大型の模型や高度な演示を多用しているためやむを得ない面もある。

常設展示のメインテーマに自然条件や中央との位置を表示する例はいくつかあるが、地域の枕詞のようなもので、必ずしも展示に地理的な配慮をしているとはいえない。通史を基本にしていることから、地理的配慮は展示の大区分では表面にでることは少なく、中・小項目でみられるようになる。原始・古代の展示では縄文時代の黒曜石・ひすいの流通、土器様式の共通性などが各地の博物館にみられる。福井県立博物館では、笏谷石製石棺分布、越前と若狭の古墳副葬品の比較、古代寺院の瓦の地域ごとの比較、渤海との交流、明治初期の福井県域の確定過程、民俗の民家環境復元模型などで事象の分布、地域による違い、位置関係などがわかるようにしている。地理的配慮によるか否かは問題としても、近世の交通や近代の産業形成などは取り上げているところが少なくない。

事象の分布や、地域間の比較は最も基本的な地理的なものと言えるかもしれない。県立クラスはこの方法をときどき使うが、市町村クラスではあまり使わない。地域歴史博物館の常設展示は域内の事象の紹介を目的にしているので、誤解をさけるためにも境界外のもの、何らかの必用がない限りほとんどとりあげない。県レベルでは比較的広域のために域内でも事象の変化があって比較も意義があるが、市町村では変化が少なく、比較が意味

をなさないものである。もっとも分布や地域ごとの比較は展示スペース、資料の量に制約されることも否定できない。逆に地域の自然条件と歴史や生活との関わりは市町村ならではのものである。木曾三川下流の輪中地帯各市町村の施設、東京都葛飾区立天文と郷土の博物館、相模原市立博物館などの新しい施設が地域の自然条件を展示の主題にしていることをあげるまでもなく、多くの施設が多かれ少なかれ取り上げている。県立クラスは域内地域を平等に取り上げるという考えがあるために、多様性に対応しきれないのである。

特別展は常設展にくらべてテーマが個別的であり、内容もはるかに掘り下げたものになる。大がかりな模型製作などはできないが、逆に実物資料だけで構成されること、一般的な知識・関心に縛られないことから、博物館の事業の華的な存在である。本来、それぞれの施設の調査・研究活動を基礎にして行われるものであるが、他で企画されたものをあてることも少なくない。

特別展は担当学芸員の関心や考えが常設展より強く反映されるので、タイトルだけでも地理的配慮の有無をみることができる。一覧表を作ると、地理または自然との関わりを感じさせるものは古地図に関するもの、川など限られたものである。またこのようなテーマのものでも地理出身者が関わったとは限らない。個々の事情は次のようなものである。石川県立歴史博物館には橋礼吉が副館長として在職したが、地理を感じさせるものはおこなわれていない。群馬県立歴史博物館には「利根川」があるが地理出身の人が主担当ではなかった。長野市立博物館には「千曲川」「地図」展示に地理が関係していそうだが、地理

を専攻した人はいないとのことである。福井県立博物館の「川の生活誌」は筆者が民俗の立場で担当した。この企画では、「潤す」「運ぶ」「育む」「壊す・浸す」「遮る・流す」の項目を設け、「潤す」では水争いと灌漑用具・雨乞、「運ぶ」では川船と筏、川口の港、「育む」は河川漁労、「壊す・浸す」では水害と河川改修、割換え、「遮る・流す」では川の持つ境界・他界としての性格、橋のもつイメージなどを取り上げた。川を取り上げたこと自体は地理出身であることが影響したとも言えるが、河川交通や川の性格では資料の不足で地域に密着したものにはならなかった。また展示に華やかさを加えることもあって「川口遊楽図屏風」「鴨川遊楽図屏風」「諸国名橋奇覧」などの美術作品、十王図に描かれた三途の川、二河白道図、かっぱの絵まで利用した。

福井県立博物館では古地図の展覧会も行ったが歴史分野の学芸員が担当した。和歌山県立博物館の荘園図の展覧会はまさしく額田雅裕の担当とわかるが、他に地理出身の額田ならではというものはない。近世の絵図などの展覧会は各館で行われているが、地理担当がおかれていないために他分野、ことに歴史担当がすることが多いようである。青森県立郷土館の「空中写真で見る地域の変貌」や「地形図で見る都市の変貌」は地理出身で産業担当、東北の剝船研究で知られる昆政明が担当した。20年ほど前で空中写真やランドサットの写真利用、鳥瞰図と地図の組み合わせなど当時としては斬新な方法で評判になったという。ただし地理出身であること強く主張する内容の企画は就任してまもないころだからできたが、最近では歴史担当の若い学芸員が絵

図展をするようになったので、この種の新たな企画はもっていないという。地理出身であっても、日ごろ地理以外のことに従事しているために、地理を表に出せなくなったとも言える。

Ⅲ. 博物館の性質と地理学

ていねいに見ると常設展、特別展とも地理的配慮をしたものが少なくはないと思うが、美術・考古・歴史・民俗に比べると圧倒的に数が少ないことは否めない。これは博物館の性質や実状と、地理ないし地理学の性質のずれによるものと言える。

地域歴史博物館が急激に増加・大規模化したのはおおむね1967年の神奈川県立博物館の開館以降である。また文化庁による歴史民俗資料館建設補助も市町村のやや規模の小さい博物館を増加させている。こうしたことが可能になったのは地方公共団体の財政力が増し、文化的事業に行えるようになったためであることはいうまでもない。しかしそれにも増して、都市部の開発と新しい住民の流入、農村部の人口減少に対応し、地域を理解し、誇り・愛着をもたせることが必要になったことがあるだろう。この問題への対応が県史や市町村史（自治体史）の編纂事業であり、歴史博物館の設置であった。また同時に進行していた、開発に伴う遺跡の発掘と出土品の増加、民俗資料の消滅と収集などへの対応も、地域歴史博物館の任務になった。自治体史編纂、考古学の発掘調査などとの関係付けで、当然のこととして、博物館でこれらの分野が重視されることになる。

さて、誇りの源になるためには博物館に展

示される資料は、できたら教科書にでてきたり、マスコミにたびたび取り上げられるようなこと・ものが望まれる。それによって博物館は、地元の人が何回も訪れる可能性が増し、たまたまその施設を訪れた人にある種の感激を与えることもでき、その施設または収蔵資料で観光客を呼ぶことも可能になる。明治の皇室博物館は国内の優れた美術品を集め、ナショナリズムを高揚するための装置の一つとして機能したといわれるが、地域歴史博物館もそうした面をもつ。一般に博物館の展示には目玉とかロマンといわれるものが求められ、したがって展示する資料も珍しいもの、古いもの、完全な優品、権威があるもの、話題性のあるものが喜ばれる。美術館に比べると優品主義の薄い歴史博物館も決して例外ではない。ICOM (International Council of Museums 国際博物館会議) では自然保護区域や遺跡まで博物館と定義しているが、建物に収まるものだけを考えている間はこうした面は改まらないだろう。

文化財保護法第2条は「建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産でわが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料」(第1項)、「衣食住、生業、年中行事行事等に関する風俗慣習、民俗芸能及びこれらに用いられる衣服、機具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの」(第3項)などが同法でいう文化財だと定義し、それらのなかで重要なものを重要文化財または重要有形(無形)民俗文化財に指定する、と規定している。この定義にあげられているものは、有形文化財に芸術的

価値が強く現れているとはいえ、ほぼ歴史博物館の収集すべき資料の「実物」(博物館法第3条第1号)にあたる。歴史博物館は文化財と極めて密接な関係にあり、少なくとも観覧者を呼ぶためには文化財の論理が大きな位置を占めているのである。

では地理はどうだろうか。学校教育の地理は歴史と対比され、現在の様々な事象を空間的な位置や広がりで見ると意識されているだろう。あるいは一般の人にとって地理とは「よその土地のことを知る手段」でさえあろうという。福井県内の市町村史で珍しく「人文地理」の章を設けている『芦原町史』『和泉村史』『西谷村史』では、人文地理とはまさしく、刊行当時の産物や交通などを記述したものである。地理がこのように理解されているなら、過去の資料を扱う歴史博物館が、主要な事業対象に取り上げないのは当然でさえある。

次に地理学がものを重視しないことがあげられる。博物館の基本は展示であり、展示の中心はものである。ところが地理学では、ページ数が制限され表現を圧縮しなければならぬとはいえず、ここ数年の『人文地理』を見ても、ものの図・写真を議論の基礎として使っているのは黒田晃弘の白山参詣曼荼羅に関する論文¹⁾ ほかいくつか以外に思いうかべることができない。地理学が広い対象をもつにもかかわらず、その多くの研究がものの記述を必要とせず、数字など一段抽象化されたところから始まっており、ものを軽視しているのではないかとさえ思われる。

出口晶子の『日本と周辺アジアの伝統的船舶』²⁾ に対して小林茂は「伝統的船舶の形態や建造技術が中心であるが、筏船の場合のよ

うに機能の記載があると、この種の技術が継承されてきた背景がよくわかる（下線は筆者による）」と評している³⁾。出口の研究が東アジア各地で船を実測し、その図から、技術の伝播、変容を考えていることを軽視している、と思うのは深読みのし過ぎだろうか。また筆者は福井県内の手織機の集成をめざして資料の調査・図化⁴⁾をしたが、その過程で水野雅夫の「農村織物業の発生と蚊帳地生産の衰退—福井県今立郡における事例—」⁵⁾を知った。水野の研究は福井県今立郡今立町を中心に絹織物業の発生・拡大を織物業者に残された記録、土地名寄帳などを使い社会的・経済史的に研究したものである。ここでは史料にあらわれる「バタン」「大和機」「ながはた」の名称をあげ、蚊帳地織りの技術が近江から導入されたことを指摘しながら、それらを具体的に検討していない。そのために、羽二重生産の初期には蚊帳の織機の箆密度を上げて使用しただろうと考えている。しかし織機の構造、そこからくる能率の違い・製品の品質、また一般に新しい種類の織物を始めるときには織機を含めた技術も新しいものが導入されることから考えると肯定しがたい⁶⁾。水野論文はものばかり見るあまりに私が見落とししたことにも指摘しており、観点の違いとも言える。しかし経済地理学では製造用具であれ、製品であれ、ものを検討・記述が軽く考えられていることは事実だろう。

もっとも史学も必ずしもものに直結するわけではない。ただ史学は基礎資料である古文書が、単体でも宝物視されるものがあるように、地理よりもものとの関わりがあると見なされているのである。地図を全く含まない地理学の論文は異質なものであろうが、ものを基

本におかないことも博物館では異質なのである。

3点目に、人文地理学と他の学問分野の重なるの大きさがあげられる。学問が事象の見方であるなら、対象が共通していてもふしぎはない。しかし先にあげた黒田の論文や、文化、社会に関する『人文地理』掲載の論文は、史学関係でも民族学関係でも宗教史関係でもほとんど違和感を感じることがないだろう。そうなると、博物館の職員を採用する際に専攻が問題になれば、人文地理よりもより現状に適合した専門性の強い他の分野出身者を選ぶだろう。

IV. 地理を展示する博物館

—メディアとしての博物館の制約—

博物館と地理学の否定的な関係ばかり指摘したが、地理学を前面に出している施設もあるし、地理学出身者がいる施設はかなりある。

相模原市立博物館では人文地理が博物館の一分野として位置づけられ、展示にも人文地理がある。ここは1995年11月開館の新しい施設で、自然・歴史展示と天文展示がある。人文地理は「地域の変貌」のタイトルで、「台地の生い立ち」「郷土の歴史」「くらしの姿」「人と自然の関わり」と続く自然・歴史展示の最後におかれている。展示の配置順番が示すように、時代としては近・現代である。この項目は①「旧集落と上溝市場」、②「軍都計画と相模原」、③「高度経済成長と相模原」の小項目にわかれ、いずれも土地利用図を使用している。相模原市は台地の農村と在郷町から大都市近郊のベッドタウンへの劇的な変貌をとげており、移住してきた人に市の生い

立ちを知らせる上で、これは大きなインパクトをもつ。また近年の市街地の景観変化を示す模型も大変興味深い。しかし、ものとしては商家や住宅の生活用具が主になり、1960年前後の冷蔵庫やテレビも含まれる。近代の生活用具は相模原市の特色をあらわすものではなく、極端に言うなら、ものを置かなければならない、と考える展示の制約を示すものでさえあろう。

分野としての人文地理をもつことについて、担当の浜田弘明は、「博物館の歴史展示は現代を扱っても第2次大戦でとまることが多いが相模原のような近郊都市では第2次大戦後の変貌が極めて大きい。民俗の分野もものとしては民具が中心であり、経済の高度成長期の生活用具の収集はしていない。博物館は地域の今日的問題にかかわるべきであり、現代も扱わなければならない。そこに地理学が独自性を発揮できる。また、準備段階において常に職員間で地域性とは何かを共通認識としてもつようにした、地域博物館は単に展示手法としての地形模型などをおくだけでなく、全体として地域をどのようにとらえるかという地理的思考をもたなければならない」と説く⁷⁾。また、相模原市には宝物的なものがないことを逆手にとることで「川と台地」「人びとのくらし」をメインテーマに設定するという独自の展開を展開できた。相模原市が博物館建設に向けて学芸員を募集した際、人文地理学専攻を指定したのではなく、浜田以外に考古、歴史、民俗を専攻した人がいた。それらの分野と重ならず人文地理独自の立場でできることを考えた、ともいう。浜田が同館の学芸員の指導的立場にあったことから、地理を正面にたてることができたといえる。

東京都葛飾区立郷土と天文の博物館は低湿地での歴史の展開というユニークな立場を表明し、活発な事業を展開している。常設展示は低湿地農村の生活用具、水害との戦い、などが自然環境との関わりを示し、歴史部分では近世以来の近郊農村としての土地利用（ねぎの生産と販売）、及び1960年前後の町工場とその住宅などである。住宅の中にはテレビが当時の番組をながしており、質素な夕食も用意されている。同館ではここをノスタルジックシアターとなづけている。常設展示も自然環境との関わりを強く出しているが、特別展示では「低湿地の中世」⁸⁾以下のいくつかの注目すべき企画をしている。この館の人文系の学芸員はわずか3人という驚くべき数字で、地理担当はいない。ここでは史学出身で、地理学者とも密接な関係をもっている学芸員が「低湿地の中世」などを担当したという。この場合も、区内全域で確認されていた近世文書が2,000点足らず、柴又帝釈天は別の施設の計画がある、近くに大規模な美術館や博物館が多数あるという状況ゆえに、低湿地という環境、「昭和30年代」を大きく取り上げることができたようである。

以上の2館は大都市圏にあり、現代の変化が極めて大きいこと、さらにいわゆる文化財が乏しいことで、他と異なる視点を導入したものである。史学で各時代の景観や社会を研究しているとは言っても、さすがに現代までは及ばない。「現代だから地理」は疑問が残るが、一つの見識と言えよう。

地理を表に出さない施設でも、地理学出身者は相当にいるだろう。筆者の関係している民俗や産業だけでも北海道開拓記念館、岐阜県立博物館、岐阜市歴史博物館、飛騨民俗村

など容易にあげることができる。こうした施設では担当分野が違うために、日常活動では地理をあまり意識しないのであるが、時に地理学的感覚を持ち込んだり、他の専攻出身者ではしないことを試みることがある。岐阜市立博物館にいた日比野光敏は美濃和紙の展覧会を伝統産業に終わらせず、和紙が現在も続く産業であるという視点を持ち込んだ。これは民俗学出身の人ではまず考えないだろう⁹⁾。

地理が博物館の事業に位置づけられておらず、したがって地理学出身の学芸員は少ないのであるが、地理学出身であることは歴史博物館で活動するうえで、他の専攻出身よりひどく不利なことだろうか。それぞれの分野の考え方を基礎からたたき込まれているという点では専攻による違いは当然出てくる。しかし、博物館の事業・学芸員の業務が学部・院で学んだことに直結しないことにおいては史学や考古学の場合も大差ない。

博物館の展示は実物を示す優れた情報伝達手段だとされる。しかし実物またはそれに代わるものを使わなければならないことは、大きな制約でもある。歴史的な事件ももので表現しなければならない。合戦も今できの想像図ではなく、古い絵を使うことになるが、その結果、合戦のあったことを伝えるのか、芸術作品としての絵を見るのかわからないようなことになる。地主の豪華な調度を並べることができても、農村社会を大きく変えたはずの農地解放を直接的に伝える展示はほとんどない。近世の幕藩体制も大名家の武具などで表現する。歴史博物館は歴史を展示するといっても、実は歴史美術館だといわれるほどである。文献史学だけでこうした状況に対応できるはずがなく、美術や工芸などのさまざまな

知識や技術を習得しなければならない。学芸員の少なさは、現場で習得すべき範囲を一層拡大しており、学校で学んだことと共通する部分が多いということ以外は、史学が特に有利だとは言えない。福井には文化財関係または地域史研究者で地理学出身者が多数いる。この例からみても、地理出身者が現在の歴史博物館でも圧倒的に不利だということはない。むしろ、史学出身と違う見方をするだけでも、博物館に新しい流れを導くことになるだろう。ただし、現在の歴史博物館へ入ろうとするなら、基礎的な訓練を充分しておかなければならないことはいうまでもない。

V. むすび

最近、考古学の渡辺誠が「歴史博物館は通史ばかりで、どこへいっても同じような構成でおもしろくない。地域の歴史博物館は、その土地が最も輝いていた時を選んで展示をしたらもっとおもしろくなるだろう」と述べていた。ここでいう「おもしろい」は、他では見ることのできないものがあり、たびたびかけても常に知的な充足感が得られるという意味であろう。そのためには資料・事業の充実が求められるが、現在のように職員が限られた状況では手広い内容を充実させることは実際問題として不可能である。従って渡辺の「その地域が最も輝いていた時代の展示を」という提案も理解できる。地域歴史博物館でも従来あったような「総合博物館」的あるいは「通史展示」的なものよりも、特定の内容に特化した施設が増えている。しかし資料と展示が基本の博物館では、ある特定のテーマに焦点を当てると、他のテーマはほとんど無

視されることになる。そこで、住民の多様な関心に応え得るためにも地域歴史博物館は内容の充実には多少目をつむって万屋的、またはデパート的な内容になっているのである。このほかにも、模型やグラフィックの多用への反省、展示テーマ自体の再検討などさまざまな動きがある。

そうしたなかでも、地理ないし地理学は博物館の表面に立っていない。地理学が最も得意とする自然との関わりや景観などを、考古学や史学でも取り入れており、敢えて地理学が必要とはされていないとも言えよう。すべての事象に時間の推移のなかでの変遷がありそれぞれの歴史として記述されるように、空間的な広がりも記述されるべきものである。地理学ないし地理は地域歴史博物館の各分野に基礎的な知識、見方を与えている。そのうえでさらに独立した位置を占めることを望むなら、地理学の研究・教育において博物館を積極的に利用し、注文・提言をすることが必須である。歴史博物館の歴史展示が充実してきたのは、史学側から常に発言があったことを忘れてはならないだろう。

注

- 1) 黒田晃弘「国神社本白山参詣曼荼羅図に見る宗教景観像」、人文地理、44-6、1992、66-84頁。
- 2) 出口晶子『日本と周辺アジアの伝統的船舶—その文化地理学的研究—』、文献出版、1995。
- 3) 小林 茂「民族・文化」（学界展望 1995年1月～12月）、人文地理、48-3、1996、55頁。
- 4) 福井県立博物館『福井県の手織機と紡織用具』、1996、福井県立博物館
- 5) 水野雅夫「農村織物業の発生と蚊帳地生産の衰退」、人文地理、40-1、1988、64-78頁。
- 6) 蚊帳地生産を始める際に近江から機大工を連れてきていることが記録されており、1点だけであるが近江と共通する腰機を確認した。これに対して羽二重製織に使われた織機は明治25年の段階でも「大和機」「バタン」であり、いずれも高機である。
- 7) 浜田弘明「近郊都市の博物館における地理的課題—現代的視点にたった博物館活動に向けて—」、法政地理、22、1994、95～109頁。
- 8) 木村礎監修・葛飾区郷土と天文の博物館編『東京低地の中世を考える』、名著出版、1995 などの成果がある。
- 9) 北海道開拓記念館では、産業分野を地理出身者が担当していたが、その人が転出した後は農学部出身のより専門性の高い人にかわったという。